



【第5回】防災支援施設としての道の駅

今回は、道の駅米沢の敷地内で、建物西側に整備する防災支援施設を紹介します。

* * *

防災支援施設は、通常、多目的広場として活用しますが、大規模災害時には救護物資などの中継基地、緊急消防援助隊や自衛隊が野営をする場所、そして道路利用者の一時的退避場所となります。また、通常は休憩場所として活用できる東屋を3基設置し、非常時には周りを囲むテントを付け、更衣室や医療室として活用します。

東日本大震災や熊本地震が起こった際、被災地近隣の道

道の駅の建設現場より



現場では鉄骨で造られた建物が現れてきました。

の駅は自衛隊の活動拠点や住民の避難場所、水や食料を供給したりトイレを提供したりする場所として大きな役割を果たしました。このようなことを受け、近年、道の駅には「休憩機能」「情報発信機能」「地域連携機能」という3つの基本的な機能のほか、「防災機能」という新たな機能の整備・強化が期待されています。

道の駅米沢では、東北中央自動車道に隣接する交通アクセスの良さを活かし、物資の中継基地など後方支援の役割を担うため、被災後72時間トイレや飲料を可能にする耐震性の高い受水槽や自家発電装置を設置し、防災機能を強化しています。



Satomi Takahashi 高橋里美 (1886 - 1964)



上郷小学校 蔵

今回は、上郷地区出身で日本を代表する哲学者であった高橋里美を紹介します。

エピソード1

ドイツで哲学を研究し、東北大学総長に

高橋里美は明治19年、東置賜郡上郷村上新田に生まれ、地元の上郷尋常高等小学校、米沢中学校(現在の米沢興譲館高校)で学びました。母方の従弟に文芸評論家として著名な本間久雄がおり、中学時代は切磋琢磨しながら勉学に励んだといえます。その後、第一高等学校、東京帝国大学文科大学哲学科、同大学院へと進み、研究者の道を歩みま

「最も哲学的な哲学」を研究、東北大学総長を務めた哲学者

した。大学院を出てからは第六高等学校と新潟高等学校の教授を歴任し、大正10年には東北帝国大学の助教授となりました。また、大正14年から2年間はドイツへ留学してリッケルト、フツサルに師事し、新カント派や現象学派といわれる哲学の日本への導入に努め、大正から昭和初期の哲学の発展に大きく寄与しました。昭和24年、里美は東北大学の第9

代総長(学長)となり、昭和32年まで務めました。戦後の新制大学として最初の総長となった里美は、「研究第一主義」を掲げて大学発展の基盤を固め、困難な時代の大学運営に尽力しました。この精神は現在も引き継がれ、東北大学の学風となっています。

里美の哲学は「愛」

エピソード2

里美の哲学は、純粋理論としての哲学で「最も哲学的な哲学」と言われています。里美は、「包越の論理」(あらゆる存在を内に包み越える)に基づく独自の哲学体系を組み立てます。全てを統一する愛である「一在愛」という概念を作り上げ、これが日本人の精神文化の根源であり、また全ての愛の根本原理であると説きました。

里美は昭和39年に亡くなり、上新田の西光寺に葬られました。墓誌には「愛」とただ一文字が刻まれており、里美の哲学を表しています。